

(1) 教会改革

2013年2月の前法王ベネディクト16世の辞任後、現法王フランチェスコはヴァチカン内のサンタ・マルタに住んでいるため、ヴァチカン宮殿は主不在のままだった。しかし、10月10日法王は、ヴァチカン内の諸問題を解決するために、特に8人の枢機卿を任命し、「枢機卿評議会」を発足させ、ヴァチカン宮殿の図書室に入り、書記官1人を含む10人でテーブルにつき、改革案を討論した。論議は午前、午後と分かれ、10月1日より3日まで、合計6回行われた。討議事項は80項目に及び、とてもこの3日間では終わらない。今後も会合が繰り返され討議されることになっている。法王は「この話合いは長く続くだろう」と言及している。ヴァチカン聖庁の改革にあることは論を俟たない。聖庁の機関や事務所をスマートにするために「義と平和省」、「コール・ウナム (cor unum, 一心)」(アフリカを救うために元法王ヨハネ・パウロ2世によって作られた財団)、「移民省」等の整理統合等が議題に上がっている。

(2) CEI (イタリア司教会議) 改革

現在ジェノヴァの大司教バニャスコ氏を中心にして、その勢力が増大してヴァチカン内の問題が左右されるようになってきた。近年のヴァチカン内の諸問題はこのCEIの動向によって、方向が決定するというようになってしまった。前法王ベネディクト16世の辞職は、法王がこのCEIの対応に心痛し、辞職に追い込まれたという噂もある。

CEIはイタリアの政治事情に余りにも関心を持つようになってしまった。時には、イタリアの国会について、時にはイタリアの政党について議論をし、意思を公表するようになった。また、イタリア国民の政治についての方向性を中道左派に誘導しようとする動きがあった。そこで、現法王は、教会としては、政治に対してはノータッチということを大前提にしているということで、人の更迭を考えている。現議長のパニャスコ氏と3人の副議長は辞任を考えている。

それに関連して、國務長官ベルトーネ氏に代わり、大司教ピエトロ・パロリンが任命され、10月16日に就任した。パロリン氏は長い間あちこちのヴァチカン大使館を渡り歩き、外交畑で活躍してきた。中国と緊張関係にある最中、2007年に中国を訪問し、中国のカソリック信者からの書簡を持ち帰ったこともある。2009年には、ベネズエラのチャヴェス (Chaves) 大統領のもと、難しい任務に専念した。法王は各国の情勢について彼から助言をもらい、現実に対応したいということだろう。

(3) IOR : 宗教活動支援機関、通称ヴァチカン銀行の改革

マネーロンダリングの温床として、IORは、ヨーロッパ共同体 (EC) から注意と改革を促されていた。そこで、前法王は改革に着手し、総裁を更迭した。今までは、有資格団体、有資格者がIORの口座を開くことができた。その中から、一度に大金を振り込むところもあり、以前から金の出所について疑惑が持たれていたものもあった。そのためヴァチカンに対するシリア大使館の口座が以前から閉鎖されていたが、今回イラン、イラク、インドネシア大使館の口座も閉鎖された。

さらに透明性を高めるために財政情報管理局 (AIF) は、10

月9日より実質的に機能している新法18条によると、口座の90%までが合法であると発表している。残りの10%が、つまり、1,300件の口座所有者(社)に不明朗な点が確認され、1,300件の口座がIORから閉め出された。最近発表されたヴァチカンの銀行 (IOR) の内容を見ると、預金高は総額63億ユーロ (約8,400億円) である。そのうち、現金が23億ユーロ、有価証券が8億ユーロ、財産管理が32億ユーロである。預け入れ側は、全体で18,900の個人か団体である。そのうち50%が宗教者、15%がオフィスや大使館、13%が聖職者団体、9%が司教区、13%がその他である。そのうち、純益は8,660万ユーロ (約11億5,200万円)。そのなかの5,470万ユーロ (約7億2,700万円) がヴァチカンの予算に回り、損害賠償の積み立てとして3,190万ユーロ (約4億2,500万円) が用意されている。

断食の提唱

2013年8月末のシリアでの化学兵器の使用は、一般民衆、婦人、子供と多くの犠牲者を出した。そこで国際条約「化学兵器の使用禁止」条例に基づいて、アメリカなどがシリアへの武器攻撃の準備を進めた。それに対してフランチェスコ法王は反対した。「戦争は戦争を呼ぶ」「暴力は暴力を呼ぶ」と話し、世界平和は確立されないと主張した。9月1日のアンジェリス (日曜の説法) で、シリアの一般市民の平和を願い、救済するために9月7日土曜日の夕食からの「1日の断食」を提唱した。この呼びかけは、カソリック、プロテスタントというキリスト教信者のみならず、全世界の宗教者、無宗教者にも向けられた。

「断食」とは、ただ単に食事をしないということではなく、食物を摂取しないという肉体的な手段を通して精神への影響を象徴する。「断食」は外部的なものを剥がし、本質に入ること示している。「断食」はイスラム教のラマダンの月にも実施される。これは社会的次元、寛大さ、慈愛と結びついている。イザヤ書では第58章では「断食」を通して望むことが列挙されている。それを記すと、不法な鎖を外し、束縛の糸をほぐし、被抑圧者に自由を与え、飢える者にはパンを与え、貧者を家なき者を自分の家に入れ、裸でいる者に服を着せること、そういう人から目を離してはいけないと述べている。

「断食」の実例をあげてみよう。イエスは砂漠でサタンと対決する前に40日40夜の断食をしている。ユダヤ教では、神から十誡を受ける前に、モーゼは40日間の断食をしている。聖フランチェスコもリエティの町の近くの鳩の泉のそばで、40日の断食をしている。さらに、インド独立の父マハトマ・ガンジーは非暴力の抵抗方法としてよく断食をしていた。東洋では仏教僧などが断食を行う。これは自分の体をコントロールすることでもある。また、精神的により次元の高いレベルへと上がろうとする「修行」の形でもある。精神的完全な独立、物欲からの解放、悪からの解放などを意味する。仏陀も断食の後開眼したのである。天理教教主中山みきも、重大なことが起こる前によく断食をしていたようだ。たとえば、針ヶ別所村の助造宅へ出かけられた時には約30日間の断食をされている。各宗教をみると、教祖とか開祖は「断食」の奨励はしていないが、重大な決定事項の前には自ら断食をしていることがよく分かる。